浄国寺通信

号外
令和7年10月1日
発　行
熊本市北区高平
2-20-35
曹洞宗 浄国寺
編 集 者
中山 義紹

浄国寺企画 いま、心にZEN 開催案内

浄国寺恒例企画
いま、心にZEN
令和七年十一月九日（日）
午後五時　講演会　（無料）
講演　県文化財課　学芸員
竹原　明理　氏
テーマ
午後七時　「お寺でジャズ」
ジャズ　鈴木　良雄&ザ・ブレンド
演奏協力金　四千円

今年もやります

「お寺でジャズ」は、平成二十二年から、始めて、今年で十七回目となりました。折角、一般の方にも集まって貰うのだから、少しでも仏教や禅を身近に感じて頂きたいと考え、イベントのタイトルを「いま、心にZEN」と銘打って平成二十四年から、ジャズ演奏の前に一時間程度の仏教（宗教）に関する話を加えるように変えました（話は入場無料）。これまでも、カトリックの神父様と瞑想に関する対談、アメリカから日本に来てそのまま曹洞宗の僧侶になった方の経験談、坐禅会を開催している宗侶3人での鼎談、仏教心理学の話等、工夫して開催してきました。「お寺でジャズ」の方も日本ジャズベース界の重鎮である鈴木良雄氏が、東京から一流のジャズマンを率いて毎年素晴らしい演奏を披露してくれています。

開催する理由

「お寺は、葬儀や法事の場で、それ以外には近寄らない所」というイメージが一般的と思います。精神科医である名越康文先生によると「気分が落ち着かない時、何か不安な時は、坐禅や読経に触れなくてもお寺の本堂で暫くボオーッとする時間を持つだけで、何となく気分が変わるものだ、日本にはコンビニの数よりお寺が多いのだし、やたらに医者にかかって薬を飲むよりズッと効果的で安上がりだ」と言われています。本来、お釈迦様から始まった仏教は、葬送儀礼（葬式や法事）が一番大事だとは言ってません。そこに説かれているのは、人がどうやったら安らかに生きていけるのかという教えです。

浄国寺では、先代住職の時から六十年以上、一般の人を対象にした坐禅会を続けています（勿論今も）。近年、この坐禅会の参加者が増えています。しかも、若い人も結構来られます。今年で、戦後八十年です。この期間、日本人は経済的には発展しても（現在は、それさえも止まってますが）文化的には八十年間自己否定を続け、ひたすら欧米追随に走ってきました。しかし、我々は日本人であり、我々が暮らしているのは日本という国です。徒に自己否定を続け、横目で周りを伺い不安の中で暮らしていくのも辛くなったのではないかと思います。それなら、伝統が生き続けている「お寺」に足を運んで触れてもらうのもいいじゃないか？お寺の敷居を低くしたいと考え、私はこの企画を続けています。

生人形の魅力

美術雑誌などを見ていると思うこと。日本の近世（江戸）の美術工芸の技術の素晴らしさに驚きを感じます。その緻密さ、芸術ではなく職人として培われた緻密な造作には、ただ驚きを感じるばかりです。熊本市現代美術館の2代目館長で生人形展を最初に開催した南嶌宏氏が展示会のキャッチコピーとしてつけられた「近世の逆襲」というフレーズ、今になってひたすら納得です。生人形の代表作として小学館の美術全集に掲載されているものが二つ

あります。一つ目は　安本亀八作の「相撲生人形」です。日本書紀に記されている相撲の起こりー野見宿禰と当麻蹶速が、がっぷり相撲を組み合っている様子です。その筋肉や血管の描写力は凄まじいものがあります（熊本市現代美術館所蔵）。もう一つが当山に祀っている「谷汲観音像」です。西国三十三ヵ所霊験記の全てを作成して浅草で興業を打った松本喜三郎翁の最高傑作です。菩薩である観音様が、人間の巡礼の姿を借りて現れ、人を導いたという話を基にしています。仏様である観音様なのに、人間の女性の姿を借りている設定で、妙に人間くさい（艶めかしい）姿、等身大の迫力は素晴らしいものです。

今回は、大学院の修士論文で、この谷汲観音像をテーマにして卒論を書かれた熊本県教育庁文化課の主任学芸員である竹原明理氏に生人形と谷汲観音像の魅力について語っていただきます。

グローバリズムと宗教

現在　私は、熊本県第一宗務所という宗門行政単位の所長という役職を務めています。そのため、他の僧侶に比べ、宗門（宗派）の動きに敏感になってます。この数年宗門の動きがおかしくなっているようです。SDG’sと言う運動がグローバリズムに乗る形で、国を挙げて進んでいます。

「地球は一つ、民族間の利害より地球人として世界を守りましょう！」言っている事はご立派です。しかし、それを国際的に進めているのは誰でしょう？国境を越えて儲けに走っている世界の富裕層である事を忘れたくないものです。世界に共通する価値は何でしょう？経済＝富です。金銭という価値観が基準です。一つの価値に人々を走らせるのに邪魔なものは何でしょう？利害を超えて走らせる、時には戦争さえ引き起こす宗教でしょう。現在、グローバリズムを進めているのは、ビル・ゲイツを始めとする欧米の富裕層です。これ以上は触れませんが、SDG’s運動の内容だけを見ると環境保護、食料保護をうたっています。しかし、人心の安寧を守ろうと訴えたのは2500年前のゴータマ・ブッダ（お釈迦様）でこれを行動規範にまで昇華させたのは、七百五十年前の道元禅師です。何を今更、欧米の金持ち連のお先棒を宗門が担ぐのか？私は疑問です。と思っていたらファシリテーション協会が唱える会議の進行方法まで取り入れると宗派が言い出しました（ファシリテータが進める会議でアイスブレイクを用いて結論に持って行くのが民主的な方法などという言葉を聞いた事があるでしょう）。私が曹洞宗僧侶として一生かけて信じ、布教してきた道元禅師の教えまでも、一握りの金持ち（＝グローバリスト）の好き勝手にさせられているような気がします。私は、宗門の動きに着いていけなくなったと感じています。任期満了で所長は辞めますが。

お寺でジャズ

私がジャズのベース（コントラ・バス）を趣味で弾いている事は、ご存じの方も多いと思います。大学時代に所謂「ジャズ研」のサークルで弾いていました。下手の横好き（これも死語かな？）でやめられず、ずっと色んなバンドで弾いてました。仲間も高齢化し近頃は弾く機会も減りましたが、今でもジャズばっかり聞いてます。学生時代の憧れのベーシストが渡辺貞夫グループでデビューした鈴木良雄氏でした。彼が熊本ツアーで来られたときに知り合い、「あんたは面白そうだね。お寺でジャズのライブやってみない」と言われたのがきっかけでした。鈴木氏も、それ以来、私が学生時代に憧れていたジャズマンを連れて毎年演奏してくれるようになりました。今年で十七年目になります。今のグループ「ザ・ブレンド」はもう4回目になります。今年は新しいCDも出してメンバーも気合いが入っているようです。たまには、ジャズのライブに足を運んでみませんか？

婆婆は娑婆

私は、三十年以上　高平幼稚園長を務めてきた。社会が変わり、教育機関の幼稚園も認定こども園という託児施設（福祉機関）に様変わりした。生活には金が必要→金を稼ぐためには子どもを預ける事が必要→その為には預ける場所（託児施設）が必要→これが少子化対策だ。この図式が国の方針のようだ。この流れの中で、子どもが蔑ろにされている気がする。「私の将来」の為には子どもが必要→「今の私には子どもに関わる時間は取れない」→「子どもを誰かに預けざるを得ない」。この図式も理屈は分かるが、その子ども自身の成長、発達はどうなるかも重要だ。政治家は、国の為と称して託児施設に金をかけるが、子どもの為に「親が子どもと過ごす時間を作る」などと言う発想は皆無だ。親に飢えて、親の気を引こうと我が儘を言う子ども、親の顔色を見て親との距離を計る子どもが増える。思い通りにならないと他者に相談した結果　発達障がいとレッテルを貼られる子どももいる。仏教では他者との関係を「縁」という。親子の「縁」が歪になっているのではないだろうか？

定例木曜坐禅会

毎週木曜日　午後八時より　当山本堂にて
一炷（約四十分）坐禅をして、坐禅に関する著述の解説（約二十分）会費・会則一切なし、初めての方はご連絡下さい